

ふたご岩



暑い暑い夏の日です。ゴロゴロ、ゴロゴロ、石をいっぱいのせた荷車が、牛や馬に引かれて通ります。

「やれやれ、ようやく本地^{ほんじ}の原っぱの近くまで来たぞ。もうすぐ名古屋だ。がんばれ。」

ブルルツ、ブルルツ。

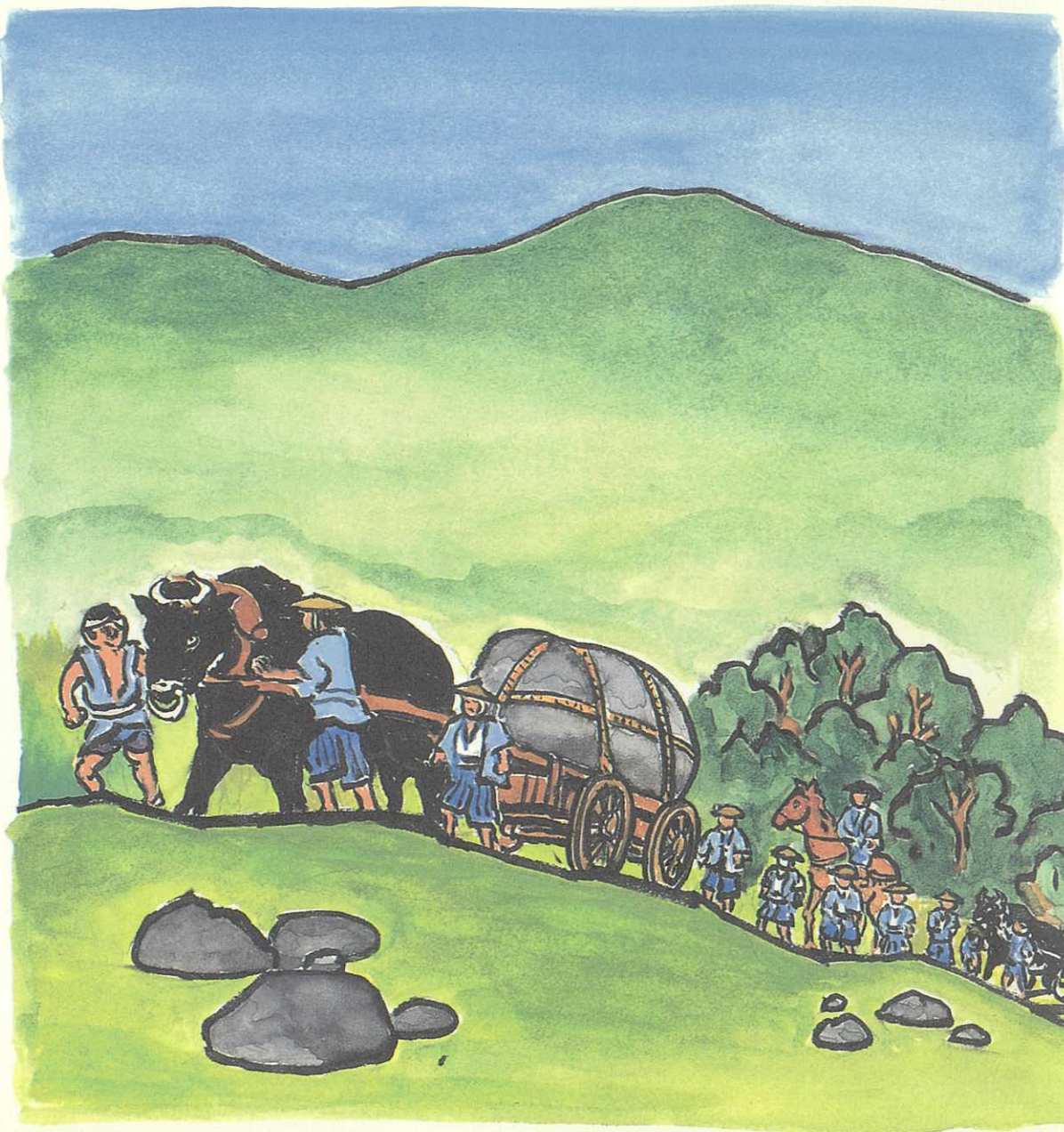
牛や馬は、苦しそうに、大きく息をしながら歩いていきます。

「わしらもたいへんだが、この牛はもっとたいへんだな。さつきから足がふらふらしているではないか。」

つきそいのおさむらいさんが、話しかけました。

「むりもないな。もう三十日も歩き続けているからな。ここでひと休みさせるか。」

大きな黒い牛は、力いっぱい足をふんばって、坂道を登ろうとしていました。「そうだな。では、おとの様に申し上げてこよう。」



「そうか。牛もそんなにつかれておるのか。この暑さではむりもない。車を止めて休ませてやるがよい。」

との様は、話を聞くとそう言いました。

「黒や、よかつたな。おとの様が、休ませてくださるぞ。」

牛は、うれしそうに、足を止めました。ところが、そのとき後ろのほうから大きな声がありました。

「おうい、前のほうで止まっているのはどこから来た荷車だ。道がせまいから、こんな所で止まってはこまるではないか。止まるな。今日のうちにお城にとどかないと、どんなにひどくしかられるのか分かっておるのか。」

それは、知らない所から来た人たちでした。

「せっかく、牛を休ませようと思ったが、後ろの人たちにめいわくがかかつてはすまないことだ。かわいそうだが、坂を登った本地ヶ原で休ませることにしよう。」

との様は、けらいにそう言うと、また牛を歩かせました。

ひどくつかれてしまった牛は、小さな坂も苦しそうです。

「がんばってくれ。もう少しだ。」

みんな、荷車の後ろをいっしょうけんめいおしました。大きな石は、右に、左にゆれて、今にもひっくりかえりそうです。

「そちらに回って、石をおさえてくれ。」

「あぶないぞ。」

「つなをしつかり引っぱれ。」

「牛の鼻輪から手を放すな。」



ゴトリゴトリ。土の道に、鉄の車がくいこんで、なかなか進みません。とうとう、どの様まで馬から下りて、荷車をおしました。

ギイツ、ギイツ。ブルルルツ。

「それいけ。」

「もうひとふんばりだ。」

一步、一步、人と牛が力を合わせて、ようやく坂を登りました。

「ああ、やっと原っぱまで来た。牛を休ませてやれ。」

ほっとしたとの様は、あせをふきふき言いました。

そのとき、人々のさわぐ声がしました。
「たいへんだ。牛がたおれたぞ。」
「しつかりせい。」

見ると、黒い牛は、坂を登りきったところで、がくりと前足をおり、草の中に頭をうずめています。

「黒や、なんとか起きてくれ。この石は、名古屋にお城をつくるための大切な石なのだ。早くどけないとたいへんなことになる。」

「早く水をくんできて飲ませてやれ。」

牛は、苦しそうに、火のような息をはいています。

おさむらいさんたちは、からだをなでてやったり、頭をささえたりして、いっしょうけんめいかいほうしました。

しかし、せいもこんもつきはてた牛は、目をとじたまま、立ち上がるうとはしませんでした。

「かわいそうなことをした。坂の下で休ませてやれたらよかったのに。」

どの様は、牛に水を飲ませました。

牛は、口からあわを出していましたが、水を少し飲むと、目を開けて、どの様を見ました。すんだ大きな目に、夏の雲が写っています。牛は、ぼろりと、なみだをこぼしました。

「水を飲ませてもらってありがとうございます。」
と言っているように見えました。

牛は、そのまま手足の動きを止め、死んでしまったのです。

どの様は、近くにあなをほり、牛をうめてやりました。



ところが、そんなことをしているうちに、真っ赤な夕日がしずみ、やくそくの日に石をとどけることができなくなりました。

「わたしが、もつとたくさんの牛をつれてくればよかったのだ。ほかのだれにも悪いところはない。わたしはここで、はらを切っておわびをすることにしよう。」

どの様は、牛をうめた所ではらを切つて死んでしまいました。

遠くから、苦しい道をのりこえて、もう少しのところまで来たのに、死んでしまったどの様と牛。

村の人たちは、とてもかわいそうに思いい、二つの石をたてて、たましいをなぐさめました。そして、よりそって立つ二つの石から、「ふたご岩」というようになりました。